

監禁の記憶

「血の色をした影」

Presented by Project-E (A. S. G.)

原案… 斎藤 和哉
文章… 茂州 一字
挿絵… 斎藤 和哉

※ この作品の内容はフィクションです。実在する人物団体などとは一切関係有りません。
※ この作品内で取上げられている内容を実際に実行すると、立派な犯罪です。現実と架空の物語(妄想)の区別が出来ない様な人は読んではいけません。
※ この作品の著作権は、サークル Project-E (A. S. G.) と、著作者が全て保持しております。無断で複製・配布・販売する事は法によって禁止されております。

試用版

- ※ 試用目的以外では利用出来ません
- ※ 正式版に比べ解像度や画質を下げています
- ※ 正式版の文章の『一部』を掲載しています

Copyright © 2004 Project-E (A. S. G.) All Rights Reserved.

成人向 (X18 指定)

気が付くと、真っ暗な空間にいた。

「俺は、何をしていたのだろう？」

暗く不気味な空間なのに、俺は自分でも理解出来ない
〈強い懐かしさ〉を感じていた。

『貴方は、ココを根元こんげんとしてる人だから……………』
優しく俺に語り掛ける誰かの声。

『そうだな……………』

時が止った様な、穏おだやかな空間で、闇に包まれながら、
俺は静かに目を閉じた。

※ 1 ～ 7 章は導入部なので、試用版では **全文カット** しています。

1. **出逢い**
で あい

2. **Trip System**
トリップシステム

3. **接触**
せつしよく

4. **Under Ground Quick Instant Messenger - Scramble Edition**

5. **館**
やうかん

6. **依頼**
いらい

7. **地下室**
ちやうど

※ 8 章以降がオムニバスストーリーによる **18 禁** 展開になります。
試用版では、『一部』を掲載しています。

8. 禁断の果実

両親が死んでもう三年になるだろうか。俺は、平凡なサラリーマンとして働いている。相変らず、世の中は世界的な競争が激しく、会社の業績は余り芳しく無い。そして仕事が忙しい割に給金は良く無い。だが、転職しても似た様なもの。倒産の危機が薄い今の会社で妥協しておくのが無難だろう。

そんな俺が落着ける場所は、両親の残してくれた家だ。もつとも、そこは病んだ空間なのだが……。

『お、お兄ちゃん…、私…お兄ちゃんが、帰って来るの遅くて淋しかったよ…』

今日も、実の妹の切なげな言葉に胸が締め付けられる。

愛しい………。仕事を立て込んでさえいなければ、もつと一緒にいられるのに。

『お兄ちゃん、もう私、お兄ちゃんが居ないと生きて行けない…。本当は、ずっと側に居たい…。』

「俺もだよ……」 俺は、体操服を着て待っていた妹を強く抱き締めていた。

『お兄ちゃん…。体操服、好きでしょう？』

俺は苦笑しながら答える。

『そうだね。でも、首輪をしているのは何故だい？』

『意地悪……』

そう言う小夜子は、妖しげな笑みを浮べた。

『なら、望み通りになってやらないとな……』

俺は、荒縄を取り出すと、小夜子の両手を後ろ手に縛った。

『あはあ……ちくちくして、気持ちいいの』

小夜子の自由を中途半端に奪った俺は、興奮しながら目の前に有る体操服の裾を掴むと一気に捲り上げ、大きな胸を顔にした。

『でかい胸だな、小夜子』

『やあ……、お兄ちゃんが揉んだから大きくなったんじゃないのお……』

『そうだったか？』

俺は白々しく答えると、小夜子の豊かな胸を鷺掴みにして、激しく、そして優しく揉んだ。

『あ……あ……。痛いけど、気持ちいい……』

『小夜子……』

俺は、右手を小夜子の股間の溝へ滑り込ませる。軽く前後にこすると、じつとりと湿り気を帯びて来るのが分る。だが、染みが広がるのが、いつもより早い？

『ん……、小夜子、この染みは何なんだ？』

俺は、意地悪く、小夜子のブルマの染みの辺りを強く刺激した。

『あああっ!!いやあっ!!恥ずかしい…。お兄ちゃんに拘束されてるって思うと……、私……』

俺は、厭らしい笑い声を発しながら小夜子を押倒す。

『うーん、良く見えないなあ……』

『あふう……、いやあ……』

『嫌なのか？じゃあ、止めようか』

俺は、口元を歪めながら、小夜子にそう言放つ。

『駄目え……。恥ずかしいけど、お兄ちゃんに見て欲しいのお……』

『くくく……』

俺は、縄を取り出すと、小夜子の両足を縛り、牢屋の柵と、ベッドの支柱へと結わえ付けた。

※ 続きは 正式版 でお楽しみ下さい

9. 藥漬の虚空

部屋には淫らな空気と、異様な臭いが充滿していた。

『ああ……うう……』

女が虚な目付きで、うわずった声を上げる。

『ああ……。ねえ、もつとシてくれるよね……。』

淫らな行為、淫らな音。

俺は、微かな虚しさを覚えながら、女の身体を食っていた。

『ああ……、ううん……』

女は、切なそうに、喘いでいる。

私、もう堕ちちゃったんだから……

もう、戻れないんだから……

でも、それは私が望んだ事なの……

だから……

もつと……

穢して……！

既に諦めたと言うよりも、二天々の素質を引出してしまったのか、女はひたすら己の求める肉欲を貪っている。

『もう一月になるのか……。この生活も』

その言葉に間を置き、女が呟く様に答える。

『もう、そんなになるの……？でも……』

『でも……』

『今の私が、本当の私だわ……。私の中の何かがそう囁く』

のよ……』

『囁く……のか……』

俺は、女の言葉を聞き溜息をつく。

『あんなに嫌がっていたのに……』

初めてこの部屋に来た時……、俺が襲おうとした時、女は

当然の事だが暴れた。だから、相棒が羽交締めにした。

そして、無理矢理ロープで両足をこじ開け、俺が強引に純潔を奪った。女は泣叫んだが、俺には、それは、とても心地良い音色に聴えた。

それが、一月前……。

『お前は、何故ここに来たんだ？』

『ソレが欲しかったのよ……。でも、今は……』

『今は？』

今は……？

『縛られるのも……、熱い蠟も……、そして、太い肉棒も……、みんな好き……。好きなの……。』

女の腕に、はつきりと残る幾つもの注射痕……。そう、この女は、薬物常用者……。

俺達が闇で動かしている薬目当てにやって来た女だ。

『ねえ……、もつとお。アソコが疼くの……。』

相棒が呆れる様な表情を浮べる。

『お前、本当に淫乱な雌だな。兄貴の肉棒がそんなに欲しいのかよ？』

『欲しいわ……。前でも後ろでも、どっちでもいいから、早く挿れてえっ!!』

※ 続きは 正式版 でお楽しみ下さい



目の前に、困った顔で訴えかける女性の姿が見える…。

「ここは、別荘地に在る僕の家の別荘。そして、この部屋にだけ、格子が入っている…。人を監禁出来る部屋になっている…。

『川崎君、こんな事をしても何の意味も無いわ……。もう、止しましやう……。ね?』

『美鈴さん。そう言われても、僕は、もう後戻り出来ないよ…』『私が真実に触れなければいけないのよ?二人で別荘に来ていただけって事に…。大学のサークル活動って事にして…。』

駄目なんだ……。もう……。

『……………無理だよ。問詰められたら、きつと口が滑すべってしまうよ。それに、僕は、この別荘に在る事自体……………』

『……………えっ?』

『…この部屋を見て、変だと思わないの?』

この部屋は、どう見ても、軟禁室なんきんしつ(少し自由の有る監禁室かんきんしつ)に見える。

『……………』

『美鈴さんが僕を好きじゃないってのは分かってる…。でも、もう我慢も出来なかった……。だから君に薬をかがせて、この別荘に來たんだ』

彼女が淋さびしそうな目付きで尋ねる。

『何故?』

『この別荘は……。止そう……。これは、僕だけの問題じゃ無くなるから……………』

『……………』

僕は、悲しそうにベッドに腰掛けている彼女を、無理矢理、押倒おしたおした。

『や、止めてっー川崎君っー早まらないでっ……………』

『もう……………、手遅れなんだよ……………。そう、もう手遅れなんだ……………』

僕は、うわごとの様に呟つぶやくと、彼女の服を、強引に剥はぎ取った。

『あ、嫌っ…』

彼女は何故か強い抵抗を示さない。もう諦あきらめているのだろうか?でも、たつた、半日はんじつで…?

僕は、疑念ぎねんを抱いだきながら、彼女の服を一枚ずつ脱がして行つた。

彼女の豊かな胸を覆おほうブラジャーを外した時、僕は衝撃しょうげきを受けた。

『えっ?!』

目の前で展開されている光景が信じられなかった。間違まちがいとは思えなかった。いや、思いたかった。大人しく、真面目まじめそうな彼女の乳首は、間違まちがい無くピアスで縫ぬい取られていたのだ。

『こ…これは…』

※ 続きは 正式版 でお楽しみ下さい

11. 気怠い日差しの中で

窓から差込み、薄地のカーテンの隙間から差込む、少し強めの日光で、俺はばんやりと目を覚めた。

(ん……、自堕落な生活も悪くは無いが……)

俺は、ベッドで一人の女と共に寝ていた。二人とも何も着ていない。

時計の針は、午後一時過ぎを指している。

『そう言やあ、腹減つたな……』

俺は、ベッドから這い出ると、ふらふらと台所へと向った。

冷蔵庫を開けると、牛乳を取出して、コップへと注ぐ。ゆっくりと飲干すと、冷たい牛乳が胃にしみる様な気がした。

ふと、窓の外に視線を移す。手入れもせず、ほったらかしの広い庭に野兎の姿が見えた。小鳥達のさえずりも時折聞えている。

『春……か……』

俺は少し遠い目をしていた。

一年経ったのか……。

ここは、俺の邸宅。山の中腹を造成した広い土地に建てられた、本来別荘として使われる物件だ。二人で住むには少し広いが、俺の元生家の様に、無駄に広くも無く、住み心地は良い。もつとも、人里離れている故に、通信網が貧弱で、買物や娯楽に縁遠いと言うのは有るのだが。

『そろそろ買出しに行かないとな……。食い物だけは、通販じゃ不便だからなあ……』

冷蔵庫の中身はそろそろ心許なくなってきた。

『明日にでも、車で麓の街のスーパーにでも行くか……』

俺が何となく呟いていると、リビングのドアが開いた。そこには、俺の女と言っているのか微妙な女性、雪絵が扇情的な姿で立っていた。

『ご主人様……、起して頂けば、お食事を用意しましたのに……』

『いやな……、お前の寝顔が可愛かったんで、起したくなかったんだよ』

『そ……、そんな勿体ないお言葉……』

何となく遠い所を見ている様な気分で、ぼつりと呟いた。

『俺達、何でもこんな関係になっちゃったんだろうな……』

『……定めだと思っています。私は、ご主人様の事をずっとお慕いしていました。勿論、今も……』

そう言うのと、雪絵は頬を染めた。いつになっても初々しさを失わない……。俺の心はこの表情を見ると激しく揺さぶられる。

『定め……か……』

外で、鳥が羽ばたく音が微かに聞えた。

俺は、ここでは無く、海辺の中都市で生れた。家は資産家だったが、俺はそれ程気にした事は無かった。もつとも、世の中の連中は、妙な目で見ると、面倒な付き合いも色々とうったが……。

そして、すぐ近くに住んでいたのが、三つ下の雪絵だ。彼女の家は俺の家とは遠縁になる家で、ごく一般的な中流家庭だったが、俺の両親はそんな事は気にしない性格だった事も有り、俺達は兄妹の様に育った。

煩わしい事の多い世界で、雪絵だけは、俺を特別視する事無く、普通に接してくれた。俺は、それだけで嬉しかった筈だ。

不幸な事に、雪絵の両親は十年程前に交通事故で亡くなり、彼女は俺の家に引取られた。引取ったと言っても、別に養子にした訳では無い。両親は、いづれ俺の花嫁にと、彼女を迎えた様だ。

そして、三年前、俺が二十一の時、両親が相次いで他界した。両親が年老いてからの一人っ子だった俺は、いづれこんな日が来る事を覚悟していたが、とても淋しかった事は覚えている。その時、雪絵が俺を慰めてくれたのを覚えている。いくら時が経ったとは言え、彼女も両親を亡くし、悲しい思いは消し去る事は出来ていなかっただろうに。

俺は、ただ、雪絵が二十歳を迎えて、そのまま結婚するものとはばかり思っていた……。それは、雪絵の両親も、俺の両親も望んでいた事。親類にも反対する者はいなかった。だから、何の障壁も無いと思っていた……。

しかし、俺は、雪絵との関係を上手く保つ事が出来なかったのだ。俺の性癖のせいで。

あの時の雪絵は怯えていた。だが、俺は、彼女の両手両足を、手枷・足枷でベッドに固定し、無理矢理貞操を奪った。そう、俺は、サディストだったのだ。

『お、お兄ちゃん、止めて……』

雪絵は、泣きそうな顔で、俺を見詰めていた。控目な性格の雪絵には、強い抵抗と言う文字は存在しなかったのだろう。

※ 統きは 正式版 でお楽しみ下さい

12. 脅迫と緊縛と私

コンクリートに何も塗装していない、殺風景で寒々とした部屋。私は、その部屋の真ん中に敷かれたマットの上で、男に押さえつけられていた。

『あんななかに、服従する気は無いわ!!』

私は、恐れ、震える身体に活を入れる様な気持で、そう叫んだ。

だが、男は動じる風も無く、薄い色のサングラスの向うに、はっきりと見える厭らしい目がにやりと笑った。

『ほう、今日も威勢がいいな。だが、お前は俺に逆らえねえだろう?』

『……………くっ』

『くくく。先ずはこの写真…。うん、しっかり写ってるねえ、万引きの瞬間が』

『くっ…』

『上司との、不倫現場…これも捨て難えな』

『うう…』

『そして極め付けは、これか。極太バ〇ブで、よがり狂う姿を映したビデオ…』

『っ…』

『ふふふ。未だ有るが、どれも、素晴らしい現場ばかりだぜ』

男の口元が歪んだ笑みを作る。

『ああ……………』

私の心の中には、絶望感が広がっていた……。

(でも、ここで怯んだら、この男の思う壺よ……………)

私は、心を絶望感で強く揺さぶられながらも、男を強く睨みつけた。

『くくく、いいねえ。俺は、気の強い女が好きなんだよ』

『……………』

私は黙って睨み続けるしか無い。だが、挑発する様な男の言葉に心を乱される。

『志甫お。今日は、お前の大好きな縛りの日だな』

『ううっ…。いい加減な事を言わないでよ! 私は……』

『んー? 私は、何だ?』

『くっ……………』

『ふん、お前がどう思っようが、逃げられねえ事実は変りやしねえんだよ。大人しくしてるんだな』

私の足には足枷が付けられ、監禁室の床に埋込まれた杭に鎖で繋がれていた。そう、この男が言う通り、私は逃げられない……。

私は、悔しくて俯いてしまった。私はどうなってしまうのだろうか……?』

『志甫お。お前の好きな荒縄を用意してやったぜ』

『うう……………』

私は、男の顔を見ない様、顔を背ける。だがそれすら男の加虐心を煽るスパイスにしかならない事にも、薄々気付きはしていた。だが悲しい事に他に術を知らない。

抵抗してもそれは虚しい事。暴れるだけ痛みが増えるだけ。

(でも、嫌。私は嫌なのよ!)

※——中略——(正式版でお楽しみ下さい)



病んでいる……。

それが、私の、この男に対する評価。この男は狂っではいけない。だから病んでいる……。

そして **私も** 病んでいる。

逃出す事が叶わなくとも、死ぬ事が出来なくても、抗い続ける事は出来た筈。なのに、私の身体は既に抗う事よりも病んだ快楽に溺れ始めている。病んだ快楽を求め始めている。

『うう…、どうして、こ、こんな…』

『お前自身がして来た事が原因だろう。勿論、その現場を俺みてえな、最低の下衆野郎に撮影されてたのが運の尽きだろうがな』
私は男の言葉に、身体を震わせる。目を逸らし、俯き、気が付くと一筋の涙をこぼしていた。

そう……。

私は……。

私は……。

男が私の乳首を刺激している。舌で、刺激したり、軽く噛んだり……。

『あ……あ……、駄目っ。止めてっ……、嫌あっ!!』
私は最後の抵抗としか言い様が無い様な、か細い声で拒否を

伝える。だが、そんなものは **当然一切無視** される。それどころか、男の欲望の炎に油を注ぐ様なものなのに。分っている事なのに。何故、私は……。

程なく、私の乳首は厭らしく勃ってしまった。私の身体はもう穢れてしまっている……。戻りたくても、もう戻れない……。

せめて心だけは……。

『ふふふ。もう、乳首が勃ったぞ?! 日に日に、感度が高まっている様なな』

『いや……』

『もう、お前は、淫乱な雌を必死に抑えようとしているだけに過ぎねえんだよ』

『あ……、そんな……』

男は私の乳房を執拗に攻めてくる。乳首を強く摘まんだり、乳房を激しく揉んだり……。

嫌な筈なのに……。

そう嫌な筈なのに、私は、抵抗するどころか、その行為を悦んでいる。その行為を待望んでいる。そして、その先の行為を……。

※ 続きは 正式版 でお楽しみ下さい

13. 狭く病んだ世界

薄暗い部屋……。鉄格子の嵌った窓と扉。部屋にはベッドと、最低限の家具しか無い。

ベッドには、タオルケットだけを掛けた男女が一组。男は虚な目で天井をぼんやりと眺めている。

『ねえ、幸せ?』

答は無い。

『貴方は何を望んでいたの?』

答は無い。

『時の流れは冷酷ね...』

答は無い。

『だって……。私の望む結末は無かつたんだもの……』

答は無い。

『私は、貴方が……。ただ、欲しかったの……』

反応は無い。ただ、ゆっくりと呼吸をする音が聞えるだけ…。

虚な目……。私を見てくれないのね…。

『でも、ココは反応するのね...』

彼の乳首を弄びながら、ナニを舐めると、彼の身体が、僅かに痙攣する様に震えた。

こんな状態になって、もう一月は経つだろうか。薬を使って、

彼を拉致監禁してから。

勿論そんな事で彼の心を得られる訳が無かった。そんな事で愛して貰える筈も無かった。

彼はひたすら抵抗した。その抵抗も暴力では無く、私を拒むと言うもの。

私は辛かった。

淋しかった。

そして憎かった。

でも、それ以上に愛しかった…。

決して私を見てくれない彼。私は、彼に怪しい薬を投与し、彼と繋がった。

でも繋がったのは身体だけ。心は遠く離れたまま。

そして、その距離が縮まる事は無かった。

もう彼の精神は薬でぼろぼろの筈。それでも、私を拒む。決して受入れてくれない。

毎日の様に、一方的に私が性的行為を仕掛け、そして、私の中に熱い迸りを受ける。

後は、食事すらともに摂れなくなった彼の身体のケアをする。毎日がその繰返し。

※ 続きは 正式版 でお楽しみ下さい

14. そして…

俺は、一通りのソフトを見終った。

『ふう……』

仮想的な時間の経過けいかを体験して、実時間以上の疲れを感じて
る。

『……うーん』

俺は、思い出したかのように、壁かべでぼんやりと赤い光を放つて
いるボタンを押した。

暫しばくすると、館の主 〈*Bloody Shadow*〉 が扉を開ける。

※この章が終章です。正式版でお楽しみ下さい。